

## ミャンマーの千代丸くん

三年ぶりにミャンマーへ行って参りました。一見、町は平穏を装っていますが、国軍と民主化勢力は散発的に衝突しており、和解の兆しはありません。大きなホテルやレストラン、土産物屋さんも軒並み営業休止や廃業を余儀なくされています。経済の落ち込みは激しく、物価も高騰して、庶民は日々の暮らしを立てていくのに精いっぱい。ミャンマービールも軍閥企業のため、タイガーやハイネケンなど外国産の高いビールを飲んで、市民はささやかな抵抗をしていました。軍事クーデターから二年余り、かの国はこれからどうなっていくのでしょうか。

イラワジデルタの周辺は比較的 안전한地域のひとつです。それでも外国人が村に泊まるのは許されず、車で3時間ほどかかるピャボンという町のホテルに宿を取りました。そこからマングローブの現場まで毎日往復しました。カウンターパート機関 **FREDA** の事業担当、チョーソートン君が私のボディガードを兼ねて、終始付き合ってくれました。

彼は30代前半、100キロを超える巨漢で、大相撲の千代丸関をちょっと小型にしたような愛嬌のある男です。大食漢でもあるので、連日連夜、私は彼とビール三昧ごちそう三昧、激辛料理を食った翌朝は尻の穴が火を噴いたようにヒリヒリしたものです。1時間おきに当局からチョーソートン君に電話がかかってきて、私の動向を報告し、ピャボンへは日没までに戻らないといけないようでしたから、彼の苦労も一方ならぬものだったと思います。

ある日、現場視察を終えてセイマ村に戻った時、彼は舟着き場の板を踏み抜いて、下に落ちてしまいました。その傍は厠（かわや）、つまり水上トイレ。大事に至らなくてホッとしました。彼は大学時代にボクシングをしていたそうで、太っちょなのにマングローブの沼地をスタコラサッサ、軽快に歩きます。初老の私がつむき加減に彼の後を歩く姿は、まるで軍曹と二等兵のように映ったことでしょう。

日本に帰る前夜、チョーソートン君がカチン族の伝統料理を食べさせる店でサンバーの肉を食わせてくれました。水鹿（すいろく）の和名で、300キロを優に超えるシカ科の大型哺乳類です。かなり精がつきます。また、おみやげにニッパヤシの若芽のお茶をもたせてくれました。これも高麗人参に匹敵するほどの強壮作用があり、ミャンマー人参の異名もあります。どういうわけか、ヤンゴンの大きなスーパーには置いてなく、イラワジデルタの町の雑貨屋で手に入れるしかありません。老境に入り元気のなくなった私への、彼一流の気遣い心遣いだったのだと感謝し、ありがたくいただきました。

チョーソートン君は、軍政に賛同できずに森林局をやめた後輩二人の面倒を見えています。自分のポケットマネーから彼らへの給料を出し、マングローブ植林仕事に関わらせているのです。後輩は先輩を頼り、先輩は後輩を世話する。森林官たちの間柄では、それが普通のことです。ミャンマーの良き伝統・文化です。その一端に触れただけでも、今回、ミャンマーに行った甲斐があったと、しみじみ思う私でありました。

(鶴田幸一)



FREDA のフィールドスタッフの面々。中央が千代丸くんことチョーソートン君